

短期大学における目的別英語教育 (1) :
 幼児教育学科「英語 I・II」の授業計画と運営

English for Specific Purposes in College (1) :
 Planning and Conducting Class Activities in 'English I・II'
 for Early Childhood Education Students

望月 健一

MOCHIZUKI Ken-ichi

1. はじめに

本稿は、筆者の勤務校である富山国際学園 富山短期大学における英語教育の実践の記録である。近年においては、学習者の視点から教育が見直される傾向にあり、論文のタイトルにおいても、「教育」よりはむしろ「学習」、「ラーニング」といった表現が好まれる傾向にある。しかし、本学の教養科目「英語」は、専門の資格取得を目指す幼児教育学科、食物栄養学科、福祉学科の3学科においては、過密な年間スケジュール、ほとんど空き時間のない時間割の中で週1コマと、限られた時間数しか確保されていない。また、授業外の学習も、各回の授業で予習や宿題の指示を与え、翌週それを確認・フィードバックするだけで精一杯であり、実習等で多忙な学生が英語の学習に進んで多くの時間を費やすことは、あまり期待できない。このような現状に鑑みて、本稿のタイトルは、いささか旧式であるが、「短期大学における目的別英語教育」とさせていただいた。¹

筆者が富山女子短期大学(現、富山短期大学)に着任した1987年から2000年頃までは、一般教育科目「英語」のテキストは各学科の専門教育とは直接関係のない外国事情を扱った総合教材、エッセイ、短編、文法や作文の問題集等が主流であった。このことは、開学時には教養学科1学科であった本学の歴史も、ある程度関係していると思われる。しかし、この時期に筆者が非常勤講師を勤めたある国立大学においても、状況はほぼ同じであった。今世紀に入ってから全国的に学部・学科の専門教育に合ったESP教育が盛んに行われるようになり、本学の食物栄養学科、幼児教育学科においても、この流れを汲んだ英語の授業が行われるようになった。例外は、1996年に新設された福祉学科で、初年度より福祉の分野の読み物を教材に使用し、今日に至っている。

今年度は、勤務校においてWebシラバスと連動した新形式による「授業アンケート」がスタートした記念すべき年にあたるが、本稿執筆の時点で後期の「授業アンケート」は、まだ実施されていない。また、今回取り上げる幼児教育学科は、今年度は入学者数増加のため1クラス約50名で1年次「英語I」の授業を実施、個々の学生の学習意欲や学力に大きな差が見られ、授業運営方法を見直す必要性に迫られている。このような事情のため、本稿(1)では、「授業アンケート」結果のデータ分析よりはむしろ、それ

以前の授業計画立案と教室運営面を主に扱うことにする。ただし、教室内のタスクを扱う部分では、平成 25、26 年度に実施された「授業評価アンケート」における学生の自由記述より適宜引用しながら考察を加えていきたい。

2. 「動機づけ」とは？

2.1 学問領域としての「動機づけ」

「動機づけ」(motivation) は、20 世紀前半より心理学の重要な研究領域であったが、第二外国語習得(L2)の分野における開拓者は、カナダのガードナー(Robert Gardner)、ランバート(Wallace Lambert)、クレメント(Richard Clement)らである。このL2動機づけ研究がカナダで始まったこと背景には、この国が英語とフランス語という世界の二大言語使用地域であり、全住民がこれら二つの言語のいずれかの「公式の」話者に二分されているという特殊な事情があった。

サイデッカーとフリーマン(Sceidecker & Freeman 1999)は、『生徒から最大限のものを引き出す: 有名な教師達はどのようにして子ども達に「動機づけ」を与えているか』の中で、「動機づけが今日、教師の直面する最も複雑で対応を迫られる課題であることは間違いない。[Motivation is, without question, the most complex and challenging issue facing teachers today.]」と述べている。² 「動機づけ」が、人間の心の最も基本的な側面の一つであり、何かを学ぼうとする者の学習成果を大きく左右するものであることには多くの人が賛同するであろう。しかし、この「動機づけ」という大変便利な語には、実は非常に多岐に渡る側面や様々な複雑な問題が含まれている。

2.2 ドルニエイの「動機づけ」を高めるための 35 の方策

ドルニエイ(2001)は、『動機づけを高める英語指導ストラテジー』において、「私の個人的な経験からすれば、本当に外国語を習得したいと願う(すなわち、真に動機づけられている)学習者の99%は、言語適性とは関係なく、最低限かなりの役立つ知識を身につけることができる。[My personal experience is that 99 per cent of language learners who really want to learn a foreign language (i. e. who are really motivated) will be able to master a reasonable working knowledge of it as a minimum regardless of their language aptitude.]」と述べている。³ 彼は、この著書の中で、外国語学習のための動機づけの方策を35のストラテジーにまとめている。これらの中には、「4. 生徒の親たちと協力関係を築く」等、大学生には当てはまらないと思われるものも含まれるが、筆者が授業運営において重要と考えているのは、以下の7つの項目である。

5. Create a pleasant and supportive atmosphere in the classroom. ⁴

15. Make the curriculum and teaching materials relevant to the students. ⁵

17. Make learning more stimulating and enjoyable by breaking the monotony of classroom events. ⁶

- 18. Make learning stimulating and enjoyable for the learner by increasing the attractiveness of the tasks. ⁷
- 20. Present and administer tasks in a motivating way. ⁸
- 32. Provide students with positive information feedback. ⁹
- 35. Use grades in motivating manner, reducing as much as possible their demotivating impact. ¹⁰

- 5. 教室に楽しく、支持的な雰囲気を作る。
- 15. 教育課程と教材を、学習者に関連の深いものにする。
- 17. 教室内での活動の単調さを打破することによって、学習をより興味深く楽しいものにする。
- 18. タスクの魅力を増すことにより、学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする。
- 20. 動機づけを高める方法でタスクを提示し、実施する。
- 32. 肯定的情報フィードバックを学習者に与える。
- 35. 動機づけを高める方法で評点を用いる。評点の持つ動機づけを失わせる衝撃をできる限り少なくする。 ¹¹

これらのうち、筆者は特にストラテジー15を、専門職の資格取得を目標とする学科の英語の授業計画を立案にあたって出発点とすべき項目と考えている。この項目について、ドルニエイは本文の中で、次のように敷衍して説明している：「・・・教育学の文献で教師に提供される動機づけに関する助言の多くは、煎じ詰めれば次の一般的な原則にまとめられる。すなわち、担当している生徒がどんな目標を持っているか、そしてどんな内容を学習したいと思っているかを理解して、そのうえで、この要望を教育課程の中でできるだけ多く取り入れよ。これは十分納得できる指摘である。生徒は教えられる内容に学習する価値があると考えなければ、学習する動機づけを与えられることはないのだ。

[... , much of the motivational advice offered to teachers in the educational literature boils down to the following general principle: *Find out what your students' goals are and what topics they want to learn about, and then build these into your curriculum as much as possible.* This makes sense: students will not be motivated to learn unless they regard the material they are taught as worth learning.] ¹²

また、このストラテジー15には、さらに以下の3つの細目が含まれている。

- 15-1. Use needs analysis techniques to find out about your students' needs, goals and interests, and then build these into your curriculum as much as possible.

15-2. Relate the subject matter to everyday experiences and backgrounds of the students.

15-3. Enlist the students in designing and understanding the course. ^{1 3}

15-1. ニーズ分析の手法を用いて担当する生徒のニーズ、目標、そして関心について理解し、次にこの知見をできるだけ多く自分の指導計画の中に取り入れる。

15-2. 指導内容を生徒の日常体験と背景に関連づける。

15-3. 授業の計画と運営に生徒の協力を得る。

「教育課程と教材を、学習者に関連の深いものにする」ことは、学習者が個人の場合とは別として、教室運営において大部分の学習者の将来の目標や興味関心が一致している場合には大変有効であり、多大な効果が期待される。この点に注目したのが、近年、日本の大学・短大が特定の分野を専門に勉強する学部・学科の学生を対象に行っている目的別英語教育、すなわち ESP である。

本稿(1)で取り上げる幼児教育学科「英語 I・II」の授業においても、学習者に関連の深い教材を選び(ストラテジー15)、魅力的なタスク(ストラテジー18)を動機づけを高める方法で提示し(ストラテジー20)、活動が単調に陥らないように工夫しながら(ストラテジー17)授業を展開し、時には評点を用いながら肯定的情報フィードバックを行う(ストラテジー32, 35)ことによって、教室に楽しく支持的な雰囲気を作る(ストラテジー5)ことが授業の成功につながるものと筆者は考える。

3. 目的別英語教育とは? : English for Specific Purposes

3.1. ESP と EGP

1980年代を中心に、ウィドウソン(Henry Widdowson)は、英語教育を長期的な目的が異なるという観点から、一般的な能力開発を行う教育である EGP (English for General Purposes) と、限定された能力を育成する ESP (English for Specific Purposes) に二分して捉える見方を提唱した。¹⁴ 前者は一般的な能力開発としての教育であるが、これに対して、後者は特定の専門分野における限定された能力を育成する訓練である。

3.2 ウィドウソンの ESP 理論より

限られた紙面の中ではあるが、ここで ESP の提唱者ウィドウソンの論文より、一箇所引用しておきたい。彼は、「フォーラム EIL, ESL, EFL: グローバルな問題とローカルな関心」の中で、「特定の目的のための英語」(English for Specific Purposes) について以下のように述べている。¹⁵

... Register is said to be a variety of language which has developed to serve uses for language rather than users of it. So it is that we can talk of the English used

for business, banking, commerce, various branches of science and technology. This is English for professional and academic activities. *English for specific purposes*. . . . The emphasis here is on communication and information rather than community and identity. So one way of resolving our dilemma is to let English diversify into kinds of independent dialect, but keep it in place as a range of registers. Speciation in the one case is counterbalanced by specialization in the other. And after all when we talk about English as an international language we generally mean the specific use that is made of it for these professional and academic purposes. (*Italics Mine*)

<試訳> . . . 言語使用域とは、言語の使用者というよりはむしろ、言語の使用のために役立つように発達した様々な種類の言語であると言われる。それで、我々はビジネス、金融、商業、科学や技術の様々な分野の英語について語る事ができる。これは、専門的な、あるいはアカデミックな活動のための英語である。つまり、特定の目的のための英語である。 . . . ここで強調されるのは、共同社会やアイデンティティーではなく、コミュニケーションや情報である。従って、我々のディレンマを解決する一つの方法は、英語を多くの異なる職業・階層の方言として多様化させながらも、それらを一つの大きな言語使用域に留めておくことである。ある事例における種分化は、他の事例における専門化と均衡を保っている。そして結局、我々が英語を国際語と呼ぶ時、我々は一般的に、これらの専門的なアカデミックな目的のために特定の使い方をする場合のことを言っているのである。(斜体字筆者)

ここで、少し説明を補足する。一口に英語と言っても、ビジネス、金融、商業、科学、技術等、たとえ英語が堪能であっても、必ずしも他の分野の人に理解されとは限らない、いろいろな分野の言語が存在する。しかし、一般的に言って、国際言語としての英語はこのような様々な専門的あるいはアカデミックな分野で使用されることが多い。換言するならば、今日我々は、外国との技術交流、商取引、通信、学術的な交流の場において、国際語としての英語を使用することが多いのである。

3.3. 日本の大学・短期大学におけるESP

ESP は、第二次世界大戦後、科学技術の発展やグローバル化に伴い、アジアをはじめ非英語圏の大学の間で広まっていった。研究の面でも、韓国、中国、インドといった国々において ESP をテーマに扱った英語の論文が執筆されている。しかし、日本の大学・短期大学において ESP が積極的に採り入れられるようになったのは、筆者の知る限りでは今世紀にはいつてからのことである。

ESP は、学部や学科の専門性に対応した目的別英語教育を実施する上で有効である。例えば、医学、工学、食物栄養学等を専門に勉強する学部・学科においては、専門分野

の学習に役立つ ESP 教育を行なうことが有益である。学生にとって、専門分野に関係の深い授業内容であれば、学習の目的意識が高まり、専門分野における英語のコミュニケーション能力も自然に身につくし、将来のキャリアにそのまま役立つ可能性もあるからである。筆者の経験では、工業高等専門学校、四年制大学の工学部等、特に理系の高等教育機関において、ESP 教育が積極的に採り入れられているケースが多い。「工業英語」、「技術英語」等の授業以外に、一般教育科目の英語においても、専門分野を意識した教材選択がしばしば行われている。現在、筆者が非常勤講師を勤めているある大学では、大学院博士前期課程に必修科目「高度実践英語」を設け、学生がパワーポイントを使って自分が選んだ研究テーマによるプレゼンテーションを英語で行う指導を行っている。この授業科目の担当者は、専門分野の指導教員等ではなく、英語教育、英語学、英米文学等を研究分野とする英語教員である。

これに対して、法学部、経済学部、現代社会学部等、専門性を判断基準にして入学する学生の割合が必ずしも高くない学部・学科においては、むしろ EGP を英語教育の柱とすることが適切と考えられる。入学の時点で、学生が将来どのような進路に進むかはっきりしていなくても、ある程度の一般的な英語力を身につけておけば、将来、一般職やその他の職業に就く際に役立つことが多いからである。また、このような学部・学科では、例えばキャンパス内にセルフアクセス学習センター (Self-Access Learning Center、SALC と略記)¹⁶、リーディング・ライブラリー、イングリッシュ・カフェ等を設置し、学習者の学習達成度に応じて英語科目の成績評価の一部に充てる、あるいは単位認定を行う等、英語の学習に対して意欲的な学生が個人の興味関心に合わせて自由に英語を学べるような環境作りを行うことが望ましいと考えられる。

4. 保育者養成校における英語教育

4.1. 保育の現場における外国語運用能力の必要性

グローバル化が進むにつれて外国からの移住者が増えており、例えば首都圏のある保育園では、日本語でコミュニケーションをとることができない保護者の割合は全体の約 1 / 3 を占めるという。特に最近では、保護者に対する専門的なサポートが保育者の重要な職務の一つとして位置づけられるようになってきているので、このような園の職員にとって外国語運用能力は必要不可欠である。また、家庭における子どもの様子に話が及ぶ場合もあるので、しつけのあり方等、文化の違いに関する知識も必要になってくる。

都市部に比べれば、富山県は外国人が人口全体に占める割合は少ない。「都道府県別外国人比率ランキング」(2010 年現在)によれば、東京都が 1 位で 2.423%、2 位は愛知県で 2.162%、3 位は大阪府で 1.858%であり、富山県は 20 位で 1.006%である。市区町村別に見れば、全 1,947 地域中 (各都道府県全体のランキングも含む)、1 位は大阪市生野区 (大阪府) の 20.342%、2 位は川上村 (長野県) で 15.748%、3 位が大泉町 (群馬県) の 12.974%である。富山県の最上位は 337 位の入善町 (富山県) で 1.435%、

383 位の射水市 (富山県) 1.322% がこれに続き、富山市は 565 位で 1.017% である。¹⁷ しかし、2014 年 1 月現在、富山県内で外国人比率ランキングが最も高いのは射水市で、1.91% である。¹⁸ ここには、ブラジル、中国、パキスタン、フィリピン、ロシア等、34 ヶ国からの外国人住民が生活している。筆者は、2015 年 5 月に射水市北部のある保育園を訪れる機会があったが、日本語でコミュニケーションをとることができない保護者の割合は約 2% だそうである。しかし、子どもは日本語を話せる場合が多く、職員は、保護者との会話の際には子どもに通訳してもらっているとのことである。

この他、園の方針、ヨコミネ式等の早期教育として、あるいは保護者の要望に応じて、英会話や英語活動を行っている園も多い。外部講師が指導にあたる場合が多いが、保育者もこれに理解を示し、場合によってはサポートを行う場合もあり得る。保育室内の掲示物で yellow, banana, cat 等、初歩的な英単語を見かけることも多い。

4.2. 短期大学で保育を専攻する学生のキャリア意識

本学幼児教育学科の学生は、入学当初より保育士、幼稚園教諭、児童養護施設職員を目指す者が大変多く、実際に過去 5 年間に於ける専門職への就職率は 95~100% である (就職率は、毎年 100% である)。しかし、同じ学園内の富山国際大学子ども育成学部の卒業生の進路内訳は、保育士・幼稚園教諭が全体の約 1/3 であり、その他は小学校教員、一般企業、進学と多様である。また、ある保育者養成校教員の研修会のワークショップに参加した際に、短大から四年制大学に改組した北陸地方のある保育系学部の先生から、短大の時代には大部分の学生が専門職に就いたが、四年制になってから学生の進路が多様化し、「0 免」^{ゼロメン} や「素卒業」^{す そつぎょう} (専門職の資格をとらないで卒業単位のみ取得) の学生が増えているという話を聞いたことがある。北陸地方に限定するならば、保育士、幼稚園教諭の資格を最短年限で取得できる短期大学の方が、四年制大学よりも専門意識が強い学生が入学する割合が高い傾向にあると言えるのではないだろうか。

筆者が知る限られた事例から結論を導き出すことは危険であるが、もし、このような傾向が多く保育系の大学・短大において見られるとするならば、全体的な傾向として、保育・幼児教育の分野に特化した ESP 教育は短大に適していて、四年制大学保育系学部の場合には、EGP あるいは ESP と EGP の折衷型の授業が好ましいと考えられる。筆者が非常勤講師として同じ学園内の富山国際大学子ども育成学部の「英語 I」(1 年次前期開講、必修科目) を担当した際には、保育英語のテキストに福祉の分野のリーディング教材を加えてシラバスを作成した。しかし、同じ授業科目担当の他の授業担当者は、外国事情やビートルズ等、直接保育には関係のないトピックで授業を行っていた。

もちろん、個々の大学・短大において、それぞれ事情は異なっていて、四年制大学の中にも、ほとんどの学生が専門職を目指している学部を擁している大学がある。ほんの一例を挙げるならば、桜花学園大学保育学部では保育の分野に特化した英語教育を実施していて、その実践を記録した研究論文が多数執筆され、公開されている。¹⁹

4.3. 入学者の英語運用能力

保育職は富山県でも大変人気のある職業の一つであり、毎年多くの高校生が本学幼児教育学科を受験し、その結果、短期大学としては比較的質の高い学生が入学している。

はじめに述べたように、特に今年度は大変多くの学生が入学し、1年次「英語 I」を1クラス約 50 名という大人数で実施することになった。そこで、最初に学生の英語力や得意・不得意分野を正確に把握し、その後の授業の運営を円滑に行うために、英検準 2 級一次試験問題を使って英語実力診断テスト (Diagnostic Test) を行った。英検を使用した理由は、学生が最も慣れた問題形式と考えられるからである。将来的には、TEAP (ティープ、Test of English for Academic Purposes)²⁰ を使用することも考えられるが、時期尚早であろう。筆記とリスニングのいずれか、あるいは両方を欠席した学生を除く受験者数は、100 名である。

[表 1] 幼児教育学科 1 年生の英語実力診断テスト結果 (受験者数 100 名) 2015. 10.

	短文空所補充	会話文	作文	長文	筆記小計	リスニング	合計
配点	20	8	5	12	45	30	75
平均点	9.46 (47.30%)	3.62 (45.25%)	1.90 (38.0%)	5.38 (44.83%)	20.18 (44.84%)	14.23 (47.43%)	34.41 (45.88%)
最高点	19	8	5	12	44	29	72
最低点	2	0	0	0	6	4	14

まず、総点の平均は 34.41 点 (45.88%) であった。この問題の合格点は 44 点なので、100 名中 23 名、つまり、全体の 23.0% が英検準 2 級一次試験の合格圏内に入ったことになる。セクション別に見ると、筆記試験において得点に大きなばらつきが見られた。特に、3 の作文 (語句整序問題) の正答率が低く、得点の分布も偏っていて、3 ~ 5 点 (満点) の学生がわずか 32 名 (32.0%) であるのに対して 0 ~ 2 点の学生は 68 名 (68.0%) にも達している。4, 5 の長文問題は、0 点から 12 点 (満点) まで、大きく点数差が開いている。これに対して、リスニングの得点分布は、0 (4) ~ 10 点が 22 名 (22.0%)、11 ~ 20 点は 63 名 (63.0%)、21 ~ 30 (29) 点は 15 名 (15.0%) であり、得点が極端に低い学生は少ない。ちょうど 10 点だった 7 名の学生を中間層のグループに含めると、得点が二桁に達した学生は合計 85 名であり、全体の 85.0% を占めている。ただし、この試験はまったく抜き打ちで実施されたものであり、1、2 週間前に予告した上で実施していれば、さらに成績が良かった可能性があることを付言しておきたい。

この英語実力診断テストの結果、今年度の学生の中には、文法 (特に文構造の把握) や長文読解が苦手な者が多いことが明らかになった。そこで対策として、①文法的な説明を丁寧に行うこと、②リーディングにおいて、文の構造、パラグラフの構成、また選択肢形式の設問における正解が本文のどの部分を言い換えたものかを理解させること、

③同義語、反対語、よく使われる類似した表現等を紹介しながら、英語の語彙や表現に関する知識を増やしていくこと、を今年度の授業運営上の重点項目とした。

英語嫌いの学生がいることを重く見て、苦手分野はあっさり切り捨てて、リスニング、平易な会話、歌、手遊び、ゲームのみで授業を構成するのも一つの行き方であろう。筆者も、部分的にはこういった活動を授業の一部に採り入れている。しかし、本学科の「英語」の授業の目的は、飽くまでも、総合的な英語力を伸ばすことと、保育の分野の英語表現を学ぶことであって、授業全体を限りなく保育の実技科目に近づけていくことではない。本学科には 75 点満点中 72 点を取得した数名の学生をはじめ、比較的高い学力を持つ学生も在籍しているので、このような学生の成長の芽を摘んだり、失望させたりすることのないように、楽しいだけでなく力のつく英語教育を行うことが必要である。

5. 幼児教育学科「英語Ⅰ・Ⅱ」の授業計画と運営

5.1. 教材選択と授業計画立案

保育者養成校においては、英語科目を最低 2 単位分取得できるようにカリキュラムを組むことが求められている。本学幼児教育学科においても「英語Ⅰ・Ⅱ」(演習科目)は必修科目であり、Ⅰは 1 年次後期開講で 1 単位、Ⅱは 2 年次前期開講で 1 単位である。本学幼児教育学科では、英語の履修を入学より半年遅れて開始しているが、これは 2 年次に公務員保育士採用試験の受験者が多く、教養科目筆記試験に英語が含まれる場合があるため、2 年次においてあまり英語力が低下しないようにとの配慮によるものである。

この授業の学習目標は、「総合的な英語力の向上を目指す。主に保育、幼児教育、児童福祉の分野で使われる表現を学ぶ。」である。また、2015 年 7 月に新形式による「授業アンケート」を実施した「英語Ⅱ」では、「学修成果」(学生が獲得すべき具体的な成果)として、次の 3 項目を掲げている: LO-1【知識・理解】保育・幼児教育の分野で使われる語彙や表現を習得している。また、短くて易しい英語の会話や文章を理解できる。LO-2【技能・表現】短い文章やおとぎ話を書くことができる。また、簡単な英語の問いに答えることができる。LO-5【社会性・人間性】適切にコミュニケーションをはかる意欲と能力があり、授業での活動において他の学生と協力することができる。²¹

この授業には、様々な制約がある。授業は週 1 回 2 時間(1 コマ)のみで、約 100 名の学生がほぼ全員受講し(入学前に他大学で取得した英語科目の単位が認定される学生を除く)、履修者全員にとってこの授業が在学中唯一の英語の授業である。1 年次 10 月後半より実習が始まるため、授業開講後、間もなく 2 週間の中断がはいる。しかも、実習前は事前打ち合わせ、実習後は補充実習のために何人もの学生が授業を欠席する。英語力の差は大変大きく、英語学習の明確な目標を持つ学生は少ない。このような環境で学生の英語学習の動機づけを維持し、意欲的に取り組ませる方法を検討した結果、「目的別英語教育」(ESP 教育)の考えに基づいた授業設計を行うという結論を得た。つまり、ほとんど全員が保育者になることを目指しているので、将来、保育所や幼稚園で役に立

つ可能性のある技能を習得できる内容を授業の中心に据えることにより、英語の学習が有意義なものとなるように考えた。

教材選択にあたっては、「4.3. 入学者の英語運用能力」の項目で述べたような理由により、英語の四技能(「リーディング」、「ライティング」、「リスニング」、「スピーキング」)をバランスよく採り入れていて、しかも英語の歌や手遊び歌を収録しているものを選んだ。「リーディング」で、ある程度内容のある文章を読む練習をしておいた方が、そこで習得した様々な語彙や表現を会話や作文において応用し、活用することが可能になるからである。また、公務員保育士採用試験の英語では、リーディングの問題が出題されるケースが多いので、受験希望者の勉強のためにも有益である。保育の分野の英語テキストの種類は限られているが、この条件を満たしているのは、赤松直子(2009) *Children's Garden: English for Early Childhood Care and Education Majors* 成美堂(以後、*Children's Garden* と略記)なので、毎年このテキストを使用している。

2年次には、1クラスをさらに2つのグループに分け、英語のネイティブ・スピーカーの非常勤講師の先生と筆者の2名で2つの教室に分かれて授業を担当し、前半7回と後半7回で授業担当者が交代するというかたちで授業を運営している。従って、各グループの人数は25名前後という、英語科目としては適正な人数になる。筆者は1年次に引き続き、*Children's Garden* の後半の章を扱う。ネイティブの先生には、おとぎ話(fairy tales)をテーマに7回分の授業を担当していただいている。この部分の授業は、テキストは使用せず、すべて英語で行われる。内容は、グループワークによる英語の絵本の作成、読み聞かせ、おとぎ話で使われる語彙や表現の学習等である。

それでは次に、個々の活動内容とそれに対する筆者のアプローチの仕方を、教室内での学生の反応や「授業評価アンケート」(主に昨年度あるいは、それ以前のもの)への回答を交えながら紹介する。

5.2. 教室内における活動

(1) イラストを見ながら英語で質疑応答 : Judging from Pictures

Children's Garden の各章のはじめに置かれているタスクである。ページの下半分には保育園における生活の一場面がイラストで描かれていて、ページの最初にその場面に関する簡単な英語の問いが並んでいる。例えば、実習の1日目を扱った Chapter 2 The First Day of the Internship²² の問いの文は、以下の通りである。

Look at the pictures. Then read the questions and discuss the answers.

- a) What are the children doing? What do you think they are saying?
- b) Did you play house when you were little? Where?
- c) Which family member did you pretend to be?

その下には、イラストの中に見られる事物 a~j の英語の名称が、順不同で選択肢 1 ~

10 として与えられている。

Write the number of each item in the correct box.

1. stove	2. refrigerator	3. ladle	4. rolling pin	5. mixing bowl
6. sink	7. whisk	8. cutting board	9. teakettle	10. spatula(turner)

筆者は、教室でこのタスクを行う際に、ページの下から順に上へ戻っていくかたちで授業を進める。即ち、最初は復唱 (repeat after me) で 1～10 の語または語句の発音練習から入り、必要なものに関しては、同時に日本語で意味の確認し、説明を加える。また、2. refrigerator は長い(音節数の多い)単語なので“fridge”という略式の表現がある、9. teakettle は単に“kettle”と言うことも多い等、最低限の関連知識も提供する。

記号をふられたイラストの中の事物とその答えのマッチングの際には、答えを学生に日本語で聞いて「3」とか「7」とか番号で答えさせるのではなく、“What do you call a(-j) in English?”と問いかけ、学生に“It’s a ladle.”等と英語で答えさせる。単に“ladle.”ではなく、冠詞をつけて主語動詞を使った完全な文のかたちで答えさせる。英語による質疑応答で答えの確認を行うことによって、ここでも学生に簡単なコミュニケーションの練習の機会を提供することができるからである。最初のうちは、とまどう学生もいるが、慣れてくると短時間で答えの確認を終えることができるようになる。

いよいよ、ページの一番上の質問 a)～c) であるが、まず、質問の意味を確認し(例えば、“play house”は「おままごと遊びをする」という意味である等)、必要な場合には、任意に選んだ学生と担当教員の間で質疑応答のモデルを示した後で(この場合、学生が質問役で、担当教員は答える側にまわる)、5分間時間を与えてペア・ワーク活動にはいる。その後、フィードバックとして、一つ一つの質問に対して何人かの学生に答えさせ、いろいろな答えが出てくる中で、いくつかのパターンを簡単に板書でまとめて活動の締めくくりとする。

このような授業の展開の仕方は、先に 2.2 の項目で触れたドルニエイのストラテジー 20:「動機づけを高める方法でタスクを提示し、実施する」のカテゴリーに属するものと筆者は考えている。このストラテジーを解説している個所において、ドルニエイは「必要なストラテジーとスキルを例示する最もよい方法は、見本を示すことである。私自身の 1 つの経験的法則は、「説明するな。例を示せ！」である。これは例えば、教師自身が生徒役となって、様々な役割を演じることによって可能になる。もしくは何人かの生徒に、ボランティアとして教師の説明に従って演じてくれるように頼むこともできる。[The best way to demonstrate the necessary strategies and skills is to *model* them (another rule of thumb of mine is, ‘Never explain, demonstrate!’). You can do this, for example, by pretending to be a student and performing various roles, or you can ask volunteers to act out your guidelines.]」と述べている。²³ ただし、筆者の授業の場

合は、タスクの見本は、生徒役の教師、あるいは何人かのボランティアの生徒ではなく、教師自身と任意に選んだ 1 名の学生による対話のかたちをとる。

過去の学生による「授業評価アンケート」の自由記述欄では、「皆、毎回あてられて、しゃべる機会があったので、集中することができた」、「学生に参加させていた点が良かったと思いました」、「みんなが集中できるように声をかけていた」等のコメントが見られた。しかし、教室内を巡回しながら指名した学生の傍へ行って英語で会話を行っているため、「当てた人のところへ行くことで背を向けられてしまうのは、聞こえづらい」、「一人一人のところに行くと言明が聞けないところがあったので、常に前にいて授業をしてほしい」等、改善を求める声もあった。今後は、一人の学生と会話していても、常にクラス全体に聞かせていることを忘れないようにして授業を行うようにしたい。

(2) リスニング : Listening Comprehension

イラスト、手紙文、履歴書等を見ながら CD で会話を聞き、テキストに載っている 1～5 の英文が会話の内容に合っているかどうか、T または F を選んで回答する問題である。リスニングに先立って、5 個の英語のキーワードあるいはキーフレーズの意味を、選択肢の日本語訳とマッチングさせることによって確認する設問が置かれている。

まず、Chapter 7 Activities with Watermelons²⁴ のスクリプトの最初の部分を引用する。

Tano: Children, guess what I have under the handkerchief. Ta-dah! This is a fresh watermelon. Isn't it big? Oh, it's very heavy. What shape is this? Oval? Square? Round? Yes, it's round. Do you like this fruit? Yes, I know you do. Hal, your grandfather grows watermelons, right? Wow, that's great. So he sends you some every summer? Lucky you! Oh, Akane, you eat watermelon every day! You must really love it.

田野:ハンカチの下に何があるか、みんな、当ててみて。ジャン、ジャジャー。新鮮なすいかですよ。大きいでしょ？あー、とても重い。このすいかはどんな形をしていますか。卵の形？四角？丸い？そう、丸いわよね。みんなはこの果物が好きですか？そうでしょ。ハルくんは、お祖父ちゃんがすいかを作っているの？すごいわ。そう。毎年夏には送ってくださるの。ラッキーね。えっ、あかねちゃんは、毎日すいかを食べてる！大好きなのね。

CD を聞かせる回数は、はじめの頃は 3 回、学生の正答率が高くなってきたら 2 回に減らしている。筆者は、CD を聞かせる前に、テキストに載っている 5 個のキーワードやキーセンテンス以外で、多くの学生にあまり馴染みがないと考えられる語や語句があ

る場合には、それらを板書し、発音と意味の確認を行っている。このような匙加減、配慮は、例えば履修者全員が英検準 1 級あるいは TOEIC730 点程度のレベルのクラスにおいては不要であるが、前に示した「4.3.入学者の英語運用能力」の〔表 1〕に見られる英語実力診断テストの結果から判断する限り、やはり必要と考えられる。

それでは、どの程度の配慮が必要であろうか。例えば、上の引用箇所では、1 行目に出てくる“guess”「当てる」と“Ta-dah!”「ジャジャーン」を板書する。前者に関しては、「思う」という意味だけ知っている学生が多いと考えられるし、後者は、比較的口語俗語表現の少ない高校の英語の教科書に出てくる可能性は、あまり高くないと判断されるからである。また、“oval”「楕円形」、「square」「四角形」、「round」「丸」に関しては、日本語訳の代わりに、これらの単語の下にそれぞれその図形を描く。これを行うか行わないかで、多くの学生の授業の理解度や設問の正答率がかなり違ってくる。

例えば、この箇所の理解度ををはかる正誤問題の最初の文は、1. Ms. Tano covers a watermelon with a handkerchief. である。これは会話の内容と合致しているので、T と答えるのが正しいが、予め“guess”や“Ta-dah!”という表現をインプットしておくことによって、これらの表現あるいは用法を知らなかった、あるいは忘れていた学生にとっては、かなり回答しやすくなるはずである。もう一つ例を挙げると、3. Hal's father plants watermelons every year. は、会話の内容と合致しないので F である。しかし、この場合、“Hal's father”を“Hal's grandfather”に改めれば、答えは T になる。このように、F の場合には、英文をどのように修正すれば T になるのか、必ず説明し、理解させるようにしている。

このタスクのフィードバックとしては、CD の音声に小まめに一時ストップを入れながら、一通り日本語で意味の確認や補足説明を行い、最後にもう一度、今度はノンストップで会話全体を通して聞かせて、どのくらい内容が理解できるようになったか、学生に実感してもらうようにするという方法をとっている。

学生は結局、会話全体を通算 4、5 回は繰り返して聞くことになるが、過去の「授業評価アンケート」では、「リスニングを何回も行って、聞き取りやすかった」、「リスニングを何度もしてくれたので、良かった」と好評である。

(3) 保育の現場で役立つ英語の表現 : Advice for the Internship

1～2 行程度の短い英文を和訳する問題である。内容は、実習生の えみさんが書き留めた基本的な実習の心得、実習園に関する情報、実習生へのアドバイス等である。Chapter 2 The First Day of the Internship²⁵ の最初の問題とその訳例を引用する。

① Greet people politely at the nursery school. Say a cheerful “Hello!” to everyone.

① 保育園では、誰にでも礼儀正しく接すること。さわやかに自分から挨拶をすること。

教室では、学生を指名して答えを板書させ、添削しながら授業を進めている。難しい問題の場合には、英文読解が苦手な学生をあてたりすると学習の動機づけを失わせる可能性があるので、さりげなく、できそうな学生をあてて達成感を味わわせる機会を提供するように配慮する（ドルニエイのストラテジー 23：「学習者に定期的な成功経験を与える」。特に 23-2：「課題の難易度を生徒の能力に合わせ、要求の厳しい活動と処理しやすい課題のつり合いを取る」）。ただし、これは常に成功するとは限らない。

フィードバックでは、機械的に問題の答えだけ示すのではなく、例えば、動詞“Greet”（「あいさつする」）には名詞形の“greeting”があり、“a greeting card”は「あいさつ状」の意味であること、“Say...Hello...”は一種の慣用表現であり、“Say Hello to your sister.”（「お姉さんによろしくね。」）というかたちでもよく使われる等、使われている単語や表現に関して、ある程度体系的に説明を補足することによって英語の基本的な表現の定着をはかり、応用力が育つように配慮する。また、これら 2 つの命令文において、動詞“Greet”の目的語が“people”、動詞“Say”の目的語は“a cheerful “Hello!”であることも確認しておきたい。

前にも述べたように、今年度は例年に比べてクラスサイズが大きく、個々の学生の学習意欲にも大きな差が見られた。そこで、今回初めての試みとして、第 2 回の授業でこの英文和訳と次の語句整序問題を宿題として課し、テキストに書き込むかノートに答えを書いてくるように指示した。成績評価項目「授業への参加」の一部として点数化する旨、宣言したのである。翌週、授業のはじめに見回って確認したところ、宿題をしてこなかった学生はほとんどいなかった。これによって、学期はじめの段階で、学生がテキストを忘れたり、予習してこなかったりするような事態を防ぐことができた。

(4) 子どもたちへの声かけ：Talking to Children

英語の単語を並べ替えて、子どもたちへの声かけに役立つ口語的な短文をつくる問題である。Chapter 3 Out We Go! ²⁶ から、二つ例を挙げる。ただし、() 内の英語は、正解の語順に直したものである。

1. どうしたの？どこか痛いのか？
(What's / wrong?) (Are / you / hurt?)
2. 何が悲しいのかなあ、マーサちゃん？
(What / is / making / you / so / sad, / Martha)?

短い口語的な英文を完成させる問題であるが、例年、中間試験や最終試験でテキストとまったく同じ問題を出題しても、意外と出来が良くない。4.3 の項目で述べたように、今年の 10 月に実施した英語実力診断テストでも、3 の作文（語句整序問題）が最も正答率が悪かったことと合わせて考えると、幼児教育学科の学生には、英文の構造を正し

くとらえる力、即ち文法の力が不足している者が多いようである。しかし、日々の授業においては、答えを黒板に出て書く前に周囲の友達と相談していることもあって、誤りは少ない。基本的には一人ずつあてているが、何人かで一つのタスクに取り組むのは良いことなので、見守るようにしている。答えのフィードバックにおいては、1 の問題では、“What’s wrong” の後に“with you?” が省略されていること、“What’s the matter with you?” という言い方もあること、2 の問題では、使役動詞 “make” の用法について、さらに例文を追加して説明を補足しておきたい。過去の「授業評価アンケート」には、「学生は前に出て書くなど、参加型だったので良かったと思う」、「みんなで答えを言い合って教科書の問題の答え合わせができるところがよかった」等のコメントがあった。

(5) 会話練習 : Conversation

まず、会話文の中の穴埋めや選択肢形式による設問の答えを確認した後で、数名の学生が役割を決めてロールプレイによる会話練習を行い、さらに会話の中の語句を一部入れ替えて発展練習を行うタスクである。例えば、Chapter 3 Out We Go! ²⁷ の会話のはじめの部分は、以下のようになっている。

Ota: Children, please listen. I want you to line up 1)in twos and hold hands.

Emi: Mark, hold my hand, OK? Look 2)out! A **bicycle** is coming. Step aside.

Mark: Miss Kato, do we cross here?

Emi: Not yet, because the traffic light is red. Red is for “stop.” Now the light has changed 3)to green. Let’s cross carefully.

太田: みんな、よく聞いてください。2列に並んで、手をつないでね。

えみ: マークくん、手をつなごう、いいかな? 気をつけて! 自転車が来るわよ。わきへ寄ろうね。

マーク: 加藤先生、ここで道を渡るの?

えみ: まだよ。信号が赤でしょ。赤は止まれ。今、青になったわね。気をつけて渡りましょう。

テキストでは、1)in、2)out、3)to の下線の部分が空欄になっていて、適当な前置詞を選択肢から選ぶようになっている。また、発展練習である Substitution Drill では、2行目で太字になっている **bicycle** を、1. motorcycle、2. bus、3. car といった語と入れ替えて、さらに会話練習を行うようになっている。

このタスクでは、最初に教師（太田先生役）+ 2名の学生（マーク、えみの役）で見本を示した後で（ドルニエイのストラテジー20:「動機づけを高める方法でタスクを提示し、実施する」。あるいは、もっと端的な言い方をすれば、「説明するな。例を示せ!」）、5分間時間をとってグループワーク（この場合は、3人グループ）による会話練習に入

る。学生がグループワークに取り組んでいる間、教師は教室を巡回しながら学生同士の会話を聞き、必要に応じて、発音、イントネーションの指導を行う。練習時間が終わったら、いくつかグループを選んで、みんなの前で発表させる。

幼児教育学科には、本学の他の学科の学生に比べて会話のロールプレイが好きな学生が多く、今日はこれくらいにしようと言っても、「もっとやりたい!」という声があがったりする。英語の発音に対する反応が良く、棒読みではなく、会話らしいイントネーションでロールプレイを楽しむ学生がいる。このことは、英語実力診断テストで他のセクションに比べてリスニングの成績が良い学生が多い、高校時代に音楽関係の部活動に参加していた学生が多いといった事実と、ある程度関係があるように思われる。

(6) エピソード満載の実習日誌：Reading and Listening

いわゆる英語の長文問題である。実習中のエピソードが満載の えみさんの日誌を読み、穴埋め、あるいは語（句）の二者択一形式の設問を通して、高校までに習得した文法、語法に関する復習を行い、最後に選択肢形式の設問で英文の内容理解の確認を行う。Chapter 7 Activities with Watermelons²⁸ の後半の部分を引用する。

Wednesday, June 8. . . . Mark and two other boys stopped to watch a steam shovel 3)at / for a construction site. Ms. Ota understood their feelings and didn't hurry them. They took their time watching it dig a hole. When we came back to the school, the boys drew a picture 4)of / with the steam shovel.

I learned that children express their newfound excitement not only in words but in their handiwork. It fascinates me to see the world 5)through / between the eyes of children. I'm learning a lot 6)from / to them.

6月8日(木)・・・マークさんと男の子が2人、工事現場でショベルカーを見るために立ち止まりました。太田先生は、子どもの気持ちを理解して急がせませんでした。男の子たちはじつくりとショベルカーが穴を掘るのを見ていました。園に戻ってから、この男の子たちはショベルカーの絵を描きました。

子どもたちが新たに見つけて感動したことを、ことばだけではなく、作品を通して表現することを学びました。子どもの目を通して(子どもの)世界を見ることのおもしろさを感じます。子どもたちから多くを学んでいます。

前にも述べたように、幼児教育学科の学生には文法や長文問題が不得意な者が多い。この長文問題で重点的に学習する文法項目は、前置詞である。そこで、この文章に取り組む前の週に、前置詞について簡単に復習を行う。*Children's Garden* には、巻末に文法的基礎事項を簡潔にまとめた Grammar Notes がついているので、これをベースに解説を行う。このテキストでは、前置詞に関しては、約1ページを割いて時、場所、方向、

運動等、カテゴリー別に分類し、それぞれの用法について例文が示されている。²⁹

翌週の授業では、二者択一形式の問題の答えを選びながら、最初からゆっくりとしたペースで英文の意味を確認していく。前置詞は出題される機会が少ないマイナーな文法項目なので、正解を選ぶことは難しいと考えられる。そこで、学生全員に対して二つの選択肢のうち、いずれかを選んで挙手するように呼びかけ、クラス全体の理解度を確認しながら授業を進める。例えば、3)は、その後に場所の名称である“construction site”が来るので、場所の前置詞“at”が正解である等、理由を説明し、時には例文を示しながら、読み進めていく。語彙の面では、「ショベルカー」“steam shovel” (“shovel car”ではない)、「工事現場」“construction site”、「手工芸品」“handiwork”等の語句を取り上げて、学生に復唱させて (repeat after me) 発音練習を行い、日本語を聞いて英語が言えるくらいに定着をはかる。³⁰ この際、英語圏の国の路上では“UNDER CONSTRUCTION” (「工事中」) の看板を見かけることがあるといった話をして、語彙や表現に関する知識が確実に定着するようにする。

英文解釈では、文の構造がわかるように説明しながら、日本語訳をつけていく。文法的な説明を一通り行った後で、わかったような表情の学生をあてて、和訳させる。例えば、上の引用箇所最後のパラグラフの最初の文 “I learned that children express their newfound excitement not only in words but in their handiwork.” (「子どもたちが新たに見つけて感動したことを、ことばだけではなく、作品を通して表現することを学びました」) では、“I learned that” までが主節、“that” 以降が従属節であり、“children + express + their newfound excitement” は「主語 + 動詞 + 目的語」(第3文型) の構造であることを確認する。また、その後の “not only in words but in their handiwork” は “not only A but also B” 「A であるだけでなく B でもある」の構文で、この場合、“but” の後に “also” が省略されていることを説明する。

過去の「授業評価アンケート」では、「予習をすると、授業についていける」、「英語を知ることができた」、「質問したら、わかるまで教えてくれた」、「分からないところを聞いたら、ちゃんと教えてくれた」、「だいたいの意味が合っているのに、わざわざ訂正されると少し不愉快でした」等の記述があった。最後のコメントは、授業中に学生が英文和訳を行った後でクラス全体に対して確認を行うために、改めて教員の方で可能な限り英文の構造に忠実な訳と説明を加えていることを指すものと考えられる。筆者は、これは授業の運営上、必要不可欠のことと考えているが、指名された学生の学習の動機づけが失われないように、言い方には気をつけるようにしたい。

今年度は、英語の勉強に対してあまり意欲的でない学生もいるので、確実に予習をして授業に出席する習慣を身に着けさせるために、初めての試みとして、Chapter 1 の長文問題を材料に小テストを実施した。設問は、テキストにある問題に、部分訳、指示代名詞が文中のどの語句を指すか問う問題を追加し、一切持込可というかたちで実施した。学習効果を高めるために答案回収後、その場で直ちにフィードバックを行い、次の週に

採点後の答案を返却した。

(7) マザーグースの詩歌、歌、手遊び歌：Good Time with Nursery Rhymes

テキストの各チャプターの最後に置かれた、園児達と楽しめるマザーグースの歌、手遊び歌、詩歌等を紹介するコーナーである。マザーグース（イギリスでは、ナーサリー・ライムと呼ばれる）は、英語圏の国々の歴史と文化に深く根差したものであり、政治家の演説、小説、映画等でも引用されることが多い。従って、筆者は第 1 回目の授業時間の一部を割いて、自分で作成した資料（公開講座を担当した際に作成したもの）を配布して、簡単に概論的な説明を行うことにしている。

授業では、テキストに収録されている歌のうち、次のものを取り上げている：‘Where Is Thumbkin?’「おやゆびちゃん、どこ?」、‘Twinkle, Twinkle, Little Star’「きらきら光れ、小さなお星さま」、‘Humpty Dumpty’「ハンプティ・ダンプティ」、‘Here We Go Round the Mulberry Bush’「桑の木をまわろう」、‘Mix a Pancake’「パンケーキの材料を混ぜ合わせましょう」、‘Pat-a-Cake’「ペッタン、ペッタン、ケーキ屋さん」、‘Old Macdonald Had a Farm’「マクドナルドおじさんの農場」、‘One Two Three Four Five’「いち、に、さん、し、ご（ぼくは魚を捕まえたよ）」、‘Two Little Sausages’「これは、お母さんのナイフとフォーク」、‘Apples, Peaches’「りんご、もも、（なしに、西洋すもも、誕生日が来たら教えてね）」、‘Mother’s Knives and Forks’「これは、お母さんのナイフとフォーク」、‘Hickory Dickory Dock’「ヒコリ・ディコリ・ドック（ねずみが時計を駆け上った)」。大体テキストに収録されている順に取り上げているが、アメリカ生まれで作者が明らかになっている ‘Mary had a little lamb’「メリーさんの羊」等、傾向の違う歌も楽譜のプリントを配布して一緒に歌っている（マザーグース＝ナーサリー・ライムの多くは、イギリスで発生したものと推測され、作者不詳である）。

筆者は、この活動を次のような手順、方法で進めている。歌の背景的知識の提供の後、まず歌詞の意味を確認する。次に、比較的発音が難しい個所をいくつか選んで、発音練習を行う。さらには、各行のイントネーションや弱強リズムがどうなっているか手拍子を交えてデモンストレーションを行い、英語においては常に強勢（stress）が等間隔でくることを体得させる。例えば、‘Humpty Dumpty sat on a Wall’の歌には、各行に 4 カ所強勢（強拍）があり、まずは、そのリズムを正確に刻むことによって英語の歌らしく聞こえるようになることを体感させる。この歌の場合には、できれば、子どもがスキップしているようなリズム（八分の六拍子）が根底にあることにも気づかせたい。曲想が大体つかめたところで、次はリハーサルである。クラス全体を 3 つのグループに分けて 1 グループずつ CD に合わせて歌わせ、他のグループは聞き役にまわる。これを行うことによって、一人一人がどのように歌っているか、声の出ている学生がいないかどうかよくわかる。ジェスチャーがついた手遊び歌に関しては、まずイラストの下の動作を解説した英文を読み、歌のメロディーに合わせてその通りに体を動かせるかどうか確認する。自信がなさそうな動きをしている学生がいる場合には、改めて動作に関する解

説文を日本語に訳し、動作を交えながら説明する。最後に、クラス全体で 2, 3 回通して歌って活動の締めくくりとする。

時間に余裕がある場合には、マザーグースの歌以外の英語の歌を取り上げることもある。昨年度はディズニーの『アナと雪の女王』より 'Let it Go' を取り上げたが、これは英語で歌うには少し難し過ぎたようである。この時は、ピアノの弾ける学生にお願いして伴奏してもらい、その点においては、学生にとっては新鮮な体験であった。しかし、肝心の歌の方は、十分に声が出ないままに時間切れになってしまったのが残念である。学生にとって難し過ぎる歌は、取り上げない方が賢明であろう。

過去の「授業評価アンケート」では、この活動に対する評価は非常に高く、自由記述が最も多かった。その一部を紹介する:「英語の歌が楽しかった」(同様のコメント多数)、「歌を取り入れながら授業をしているところが楽しかった」、「たくさん歌った」、「手遊びや歌を実際にやってみて印象に残った」、「CD を使って手遊びをするところが良かった」、「英語の手遊びを知ることができた」、「英語での歌遊びを沢山学べた」。

(8) 英語の創作絵本 : English Picture Books

幼児教育学科の「英語」では、保育、幼児教育、児童文化などをテーマに扱った教材を使用し、外国語や異文化の視点から専門分野を見つめ直す機会を提供しているが、2 年次では非常勤講師でネイティブ・スピーカーの教員と筆者の 2 名で授業を担当し、1 クラスをさらに 2 グループに分け、学期の前半と後半で教員が交替するかたちで授業を行っている。

ネイティブの先生には、「おとぎ話」(Fairy Tales) をテーマに 7 回の授業を担当していただいている。授業の前半では、英語で書かれたおとぎ話を教材に、英語の語彙や文法の学習、登場人物の性格分析、読み聞かせ(英語)の練習などを行う。また、有名なおとぎ話のタイトルと作者(編集者)名を結びつける楽しいクイズにも挑戦する。そして、後半では 2~3 人で 1 グループになって、英語でストーリーを作り、その内容にふさわしい挿絵を入れて、一冊の絵本を仕上げる。この授業を通して、学生達は「おとぎ話」について多くのことを英語で学び、その学習成果をオリジナルの作品のかたちにまとめている。学習の動機づけの観点からもう一言付け加えるなら、この絵本作りの活動は、ドルニエイのストラテジー 18-4:「目に見える完成品を作り出すタスクを選択する」の категория に属するものである。

今年度の 2 年生の作品のタイトルは、以下の通りである。

[表 2] 2015 年度 幼児教育学科 2 年生 英語の創作絵本タイトル

	英語タイトル	日本語タイトル
1	What do you do?	何をしているの?
2	The Bully Bear	いじめっ子のクマ

3	You Are a Bad Boy	あなたは悪い子ね
4	Mike and Strange Seeds	マイクと奇妙な種
5	Momo's Big Ears	モモの大きな耳
6	Lost Libbon	なくなったりボン
7	Yui's Selfishness	わがままなユイ
8	Monkey Boy	サルの少年
9	Lavi	ラビ
10	Best Friend	最高の友
11	Jessica and Kerosuke	ジェシカとケロスケ
12	A Piece of Cake	一個のケーキ
13	Three Wishes	3つの願い
14	Show Courage	勇気を示す
15	Don't Like Vegetables!	野菜は嫌い!
16	John and Witch	ジョンと魔女
17	Magic Pencil Friends	魔法の鉛筆の友だち
18	A Day of Bell Pepper	ピーマンの一日
19	Yukito's Hello	ユキト君の「こんにちは」
20	The Sheep Floated in the Sky	羊が空に浮かんでいた
21	A Flower Shop	お花屋さん
22	Secret of the Cavern	ほら穴の秘密
23	After Having Eating...	食べた後で・・・
24	Changing Rina	変わるリナ
25	You Are a Hero	君は英雄だ
26	Let's Eat Anything	何でも食べよう
27	No title 1 (Kumajiro & Kumanosuke)	無題 1 (熊次郎と熊の助)
28	No title 2 (A Boy who did not Put Toys Away)	無題 2 (おもちゃを片づけ なかった男の子)
29	No title 3	無題 3
30	No title 4	無題 4

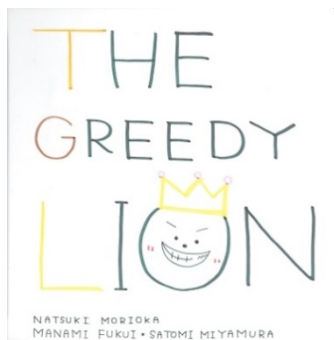
今年度の新形式による「授業アンケート」には、英語の絵本作りの活動に関して 3 件のコメントがあった：「絵本作りが面白かった」、「一人で絵本を作るのではなく友達と作ることで協力できた」、「絵本を作ることで英語の使い方を知ることができました」。また、過去の「授業評価アンケート」には、「英語の絵本の紹介をしてほしい」、「絵本とか読んでほしい」、「英語の絵本の読み聞かせを先生にしてもらいた

い」等の記述があった。本学図書館には、日本語の絵本は多いが英語のものは少ないので有名なものは取り揃えるようにしたい。教員による英語の絵本のモデルリーディングは、これまで思いつかなかったことであり、要望に応えるようにしたい。

最後に、卒業生のグループの作品を一つ紹介する。この手作り絵本は、ストーリーの本文は左側のページ中央に小さな文字で印刷されていて、挿絵は右側のページいっぱいに描かれている。しかし、紙面の関係上、レイアウトを大きく変え、挿絵は大幅に縮小し、本文の間に 2 ページ分ずつ挿入した。また、日本語訳を（ ）内に追加した。

The Greedy Lion

(よくばりなライオン)



Once upon a time, there was a greedy lion in the forest.

He always thought that he wanted to be the king of the forest.

(昔々、森によくばりなライオンがいました。ライオンは、いつも森の王様になりたいと思っていたのです。)

One day, he knew that there was a fairy who could make all the wishes come true.

He said, "I have a good idea!

I'll be able to be the king thanks to the fairy's magic!"

(ある日、ライオンはあらゆる願いをかなえてくれる妖精がいることを知りました。ライオンは言いました。「いい考えがあるぞ！妖精の魔法で王様になるんだ！」)



However all the animals wanted to meet the fairy
to make their wish come true.

The lion thought it was inconvenient for him.

He wanted to have the fairy to himself.

(ところが、あらゆる動物が願いをかなえてもらうために妖精に会いたがりました。
ライオンは、これは不都合だと考えました。妖精をひとり占めしたかったのです。)

The lion said to the bear,

“You should cross the bridge, then, you can meet the fairy!”

The bear said, “Oh! Thank you!”

The lion told a lie to have the fairy to himself.

(ライオンは、熊に言いました。「橋をわたって行けば、妖精に会えるよ!」熊は、
「わあ、ありがとう!」と言いました。ライオンは、妖精をひとり占めするために
嘘をついたのです。)



The lion said to the rabbit,

“You should come in the cave, then, you can meet the fairy!”

The rabbit said, “Oh! Thank you!”

The lion told a lie to have the fairy to himself.

(ライオンは、ウサギに言いました。「ほら穴に入れば、妖精に会えるよ!」)

ウサギは、「わあ、ありがとう！」と言いました。ライオンは、妖精をひとり占めするために嘘をついたのです。

The lion said to the squirrel,

You should go to the rainbow, then, you can meet the fairy!”

The squirrel said, “Oh! Thank you!”

The lion told a lie to have the fairy to himself.

(ライオンは、リスに言いました。「虹のところへ行けば、妖精に会えるよ！」リスは、「わあ、ありがとう」と言いました。ライオンは、妖精をひとり占めするために嘘をついたのです。)



The lion said to the monkey,

You should climb up to the top of the mountain,

Then, you can meet the fairy!”

The monkey said, “Oh! Thank you!”

The lion told a lie to have the fairy to himself.

(ライオンは、猿に言いました。「山のとっぺんに登れば、妖精に会えるよ！」)

猿は、「わあ、ありがとう」と言いました。ライオンは、妖精をひとり占め

するために嘘をついたのです。)

There were no animal in the forest because of his lie.

The lion said, “HAHA! I’ll have the fairy to myself!”

(ライオンの嘘のために、森には一匹も動物がいなくなりました。ライオンは、言いました。「ははは！ぼくが妖精をひとり占めにするんだ！」)



Actually, the lion knew that the fairy was near the lake.

He went there in hurry.

Then, he said to the fairy, “I want to be the forest king!”

The fairy said, “OK.”

She waved the magic wand.

(実は、ライオンは妖精が湖の近くにいることを知っていました。ライオンは急いで妖精のところへ行って、「ぼくは、王様になりたいんだ!」と言いました。妖精は、「いいわよ」と言いました。妖精は、魔法の杖をふりました。)

Then, the lion became the forest king.

He was so pleased and said,

“Wow! I look so strong!

I want to show all the animals the new powerful king.”

(すると、ライオンは森の王様になりました。ライオンは、とても喜んで言いました。「わあ!ぼくは、とても強そうだなあ!ぼくは、みんなに新しい強い王様を見せてやるんだ。」)



However, there were no animals in the forest.

“Why!? Where did everyone go?”

The lion didn't know.

(ところが、森には一匹も動物はいませんでした。「どうしてなんだ！？みんな、どこへ行ってしまったんだ？」ライオンには、わかりませんでした。)

The fairy said to the lion,

“Do you remember you told a lot of lies to the animals?

They went far away because of you.

I don't know when they will come back.”

The fairy disappeared in front of the lion.

(妖精は、ライオンに言いました。「あなたは、動物たちにたくさん嘘をついたことを覚えていますか？あなたのために、みんな遠い所へ行ってしまったのよ。みんなが、いつ戻ってくるかは、わからないわ。」妖精は、ライオンの目の前で姿を消してしまいました。)



The forest king was alone because of his lies.

He learned that telling lies brings unhappiness.

From now on he will never tell a lie again.

(森の王様は、自分の嘘のために、ひとりぼっちになってしまいました。ライオンには、嘘が不幸をもたらすことがわかったのです。これからは、ライオンは絶対に嘘はつかないでしょう。)

まず、まとまった長さの自由英作文として、この絵本は学生の 1 年次からの英語学習の一つの成果と見ることができる。一般的に言って、語学の学習成果は会話力または作文力によってはかることができる。しかし、ライティングやスピーキングによるアウトプット (output) で確認できる成果は、語彙、会話表現、文法的に正しい英文の作り方等、リーディングやリスニングによるインプット (input) の積み重ねにより達成されるものであることを忘れてはならない。作文だけやっていて作文力がつく、あるいは会話だけやっていて会話力がつくのではない。筆者は、毎年幼児教育学科の学生の創作絵本を読み返す度に、程度の違いはあっても、彼らのこれまでの英語の学習のプロセスを垣

間見るような思いがするのである。

最後に、内容に関して少しコメントを加えておきたい。ここには、西洋の多くのおとぎ話で使われるいくつかの常套手段が見られる。あらゆるおとぎ話に共通する書き出し：“Once upon a time...”、同じフレーズの繰り返し：“The lion told a lie to have the fairy to himself.”、願いをかなえてくれる魔法使い、良くない行いと、それに対する教訓等。ライオンは、妖精の魔法を借りて、森の王様になろうと考える。ライオンは妖精をひとり占めしようと、すべての動物達に対して嘘をつくが、そのことにより彼自身一人ぼっちになってしまう。妖精はライオンに一人ぼっちになった原因を教えてくれるが、彼を直接罰することはしない。ライオンは自ら、自分の非を認めて回心するに至る。この作品のユニークで優れている点は、主人公ライオンが、西洋の昔話によくあるように何者かによって厳しく罰せられるのではなく、自ら進んで自分の非を認めて、心を改めるところにあるのではないだろうか。筆者はこの物語を、日本的、現代的で洗練された、いかにも本学幼児教育学科の学生らしい作品と考えている。

6. (1) の結びに代えて

以上、いろいろな活動を紹介してきたが、保育を専攻する学生のための英語の授業にふさわしいタスクは他にもある。例えば、過去の「授業評価アンケート」には、「英語のゲームをしたい」という記述があった。*Children's Garden, Chapter 9 Children at Play*³¹では、いろいろな遊びやゲームが紹介されているので、これは当然の要望と考えられる。時間の許す限り、いくつか選んでやってみるのもよいであろう。また、これは少し高度なタスクではあるが、実習日誌、指導案、保護者との連絡帳等を英語で書かせてはどうだろうか。グローバル化の時代であり、北陸新幹線開通により、外国人が富山を訪れる、あるいは移住するケースが今後増えていく可能性があると思われる。本学幼児教育学科の学生は、「保育実習指導」等の授業で、日本語で実習日誌や指導案を書くための指導は受けているが、連絡帳の書き方の指導は受けていない。しかし、保護者が理解できる言語で連絡帳を書く能力は、今後必要になってくるのではないだろうか。

本学幼児教育学科には、水準以上の英語力を持つ学生層が一定の割合で存在しているが、必修の英語の授業以外の部分で英語に関心を示す学生は極めて少ない。「外国の児童文化」を研究テーマに扱う筆者のゼミには、例外的に毎年1～3名ほど英語が好きな学生がいて、「英語が話せるようになりたい」、「先生はどんな勉強をしたの?」、「どうしたら、英語が上達するの?」、「外国は、どんな国へ行ったことがあるの?」等、研究そっちのけで質問してくる。いろいろ答えると、熱心に聞いている様子である。外国へ行く、あるいは行きたいという学生も、例年1、2名程度いる。しかし、学年全体に対して、英語学習に対する強い動機づけを期待することは難しい。

最初に述べたように、2015年度から全学的にスタートした新形式による Web シラバスと連動した「授業アンケート」は、まだ前期分しか結果が出ていない。幼児教育学科

「英語Ⅱ」の授業に関しては、5段階による総合評価（満足度）で「5. 大いに良かった」は30%、「4. いくらか良かった」が66%を占めた。まずまずの結果であるが、大いに改善の余地があると考えている。自由記述は、「英語の創作絵本」の項目で紹介したコメント以外では、「英語を楽しめた」、「分かりやすい」、「訳が早かった。もう少し、ゆっくり言ってほしい」、「教科書以外のものも使って授業が行われていた(のが良かった)」の4件のみである。ウェブ上で回答する形式になってから、以前に比べて自由記述が短く、少なくなったような印象を受ける。後期分の「授業アンケート」の結果が出るのは、2016年2月の予定である。しかし、授業評価はともかく、授業改善の方は1年や2年のサイクルで完結するものではない。毎年入学してくる学生の授業中の様子、反応を観察し、教材の良し悪しや学習成果を分析・検討しながら、常に修正を加えつつ試行錯誤を続けていかなければならない。授業改善に終わりはない。

(未完)

<注>

- 1 本稿の日本語タイトルに関しては、廣内裕子(2012)「目的別外国語教育の一考察－看護科のESP(目的別英語教育)の英語コミュニケーションの授業報告－」『園田学園女子大学論集』第46号 pp. 99-111 を参考にさせていただいた。
- 2 Scheidecker, D. and W. Freeman 1999. *Bringing out the Best in Students: How Legendary Teachers Motivate Kids*. Thousand Oaks, CA: Corwin Press, p. 116.
- 3 Zoltán Dörnyei(2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*, Cambridge U. P., p. 2 (邦訳:ゾルタン・ドルニェイ著、米山朝二・関昭典訳(2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店)
- 4 *Ibid.*, p. 50.
- 5 *Ibid.*, p. 74.
- 6 *Ibid.*, p. 83.
- 7 *Ibid.*, p. 85.
- 8 *Ibid.*, p. 89.
- 9 *Ibid.*, p. 133.
- 10 *Ibid.*, p. 134.
- 11 日本語訳は、ゾルタン・ドルニェイ著、米山朝二・関昭典訳(2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店 のものを使用した。
- 12 *Ibid.*, p. 71.
- 13 *Ibid.*, p. 74.
- 14 Widdowson, Henry G.(1978). *Teaching Language as Communication*. Oxford: Oxford University Press.
- 15 Widdowson(1997). "Forum EIL, ESL, EFL: global issues and local interests" (*World Englishes*, Vol 16, No. 1, pp. 135-146).
- 16 セルフアクセス学習センターとは、「授業時間外にさまざまな教材や教育機器などの学習リソースを利用して言語を学習し、かつ利用する機会を学習者に提供するものである。学習者は学習アドバイジングなどの学習支援メカニズムを利用して自分で学習目標を設定し、目標達成のための計画を立てて、それを実行する能力を養ってゆくことができる。」(小嶋

- 英夫・尾関直子・廣森友人編集 (2010)『英語教育学体系第 6 巻 成長する英語学習者－学習者要因と自律学習－』大修館書店 p. 194)
- 17 都道府県・市区町村ランキングサイト「日本・地域番付」(n.d.). Retrieved October 20, 2015, from <http://area-info.jpn.org/index.html>.
- 18 『射水市民国際交流協会 News』No. 14, 2014.3., p. 1
- 19 高橋妙子 (2006)「保育のための英語絵本プロジェクトー保育部学生のアンケートからー」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第 4 号 pp. 71-84
- 高橋妙子 (2011)「英語の絵本を使った保育のためのグループプレゼンテーション」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第 9 号 pp. 103-119
- 高橋妙子 (2012)「Halloween をテーマにしたグループワーク」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第 10 号 pp. 101-116
- 高橋妙子 (2014)「保育を学ぶ学生のための英単語&フレーズ集の意義」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第 12 号 pp. 47-59
- 種村綾子 (2013) 保育学部における「全人的英語コミュニケーション活動」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第 11 号 pp. 105-125
- 20 上智大学と日本英語検定協会が共同で開発した、大学で使用されるアカデミックな場面での英語運用力をより正確に測定するテスト。テスト形式は総合的な英語力を正確に把握することができるように、「読む」「聞く」「書く」「話す」の 4 技能で構成されている。
- 21 富山短期大学では、各学科で開講されている授業科目の学習目標は、その学科の掲げる「教育方針」に基づいて設定されている。幼児教育学科の「能力基準別到達目標 (学習成果)」は、次の 5 項目である：(L01)知識理解：保育の本質と目的を理解するとともに、保育の対象となる子どもや家庭、保育の内容や方法についての専門的知識を習得している。(L02)技能・表現：子どもの発達支援に必要な保育構想力、保育展開力、表現技術を身につけている。また、家庭支援に必要な技術を活用することができる。(L03)思考・判断：現代的な保育の課題について、論理的に考察することができる。また、自らを省察し、実践的な問題解決方法の検討を通して、学びを深めることができる。(L04)関心・意欲・態度：子どもの育ちと子どもが育つ環境を的確に把握し、社会のニーズに応じた保育実践力の向上に努める。(L05)社会性・人間性：適切なコミュニケーション技術と態度を身につけ、他者との協同を図ることができる。また、深い愛情と豊かな感性・共感性をもって、子どもに対応することができる。教養科目「英語Ⅱ」の「学修成果」も、これらのうち、(L01)知識理解、(L02)技能・表現、(L05)社会性・人間性 の 3 項目を踏まえて設定されている。
- 22 *Children's Garden*, p. 12.
- 23 Dörnyei, p. 89.
- 24 *Children's Garden*, p. 45.
- 25 *Ibid.*, p. 14.
- 26 *Ibid.*, p. 20.
- 27 *Ibid.*, p. 21.
- 28 *Ibid.*, p. 46.
- 29 *Ibid.*, pp. 83-84.
- 30 これらは、保育の分野の専門用語というよりはむしろ、日常生活でよく使われる重要な語(句)である。保育の分野で使用される語彙や表現には、日常生活でも使われるものが大変多い。従って、保育の分野の ESP 教育は、他の分野とは違って EGP 教育と重なる部分が多い。
- 31 *Children's Garden*, p. 54.